

第三部：複数の歴史像に向けて ― 国民国家の想像力を脱植民地化する

1998年11月4日（水）・末川記念会館ホール

核軍拡とそれを支える宗教的ナショナリズムが推進される今日の南アジアの動きは、ナショナリズムという過去の亡霊の最後のあがきなのか、それとも21世紀の新たな悲慘を予兆するものなのか。

この第三部では、アジアの植民地社会におけるナショナリズムの固有性をみきわめ、「想像の共同体」を構築する想像力を脱植民地化しようと試みているアジアにおけるサバルタン・スタディーズの研究者を招聘し、ナショナリズムと歴史への問いを再考したい。

発話・コーディネーター：

中村忠男（立命館大学）「『アジア的なるもの』の産出とインド」

ゲスト・スピーカー：

ギャン・プラカーシュ（プリンストン大学）

‘A Different Modernity: Colonialism, Nationalism, and the Idea of India’

パネラー：

崎山政毅（神戸市立外国語大学）「モノグラフの転位」

姜尚中（東京大学情報文化研究所）「サバルタン・スタディーズによせて」

コメンテーター：

モンテ カセム（立命館大学）／川村朋貴（立命館大学文学研究科）

林淑美（日本近代文学研究）／レベッカ・ジェニスン（京都精華大学）／李静和（成蹊大学）／
岡真理（東京外国語大学非常勤講師）／ミリアム・シルバーバーグ（UCLA）／トリン T.ミンハ（カリフォル
ニア大学バークレー校）